

火を囲むと炎の揺らぎが
人と人に連帯感を生む
2004年、浅間山噴火。
言葉を探しルオムに出会う
自然に従う生き方です

農と食
の邂逅

福嶋 明美 さん

群馬県長野原町

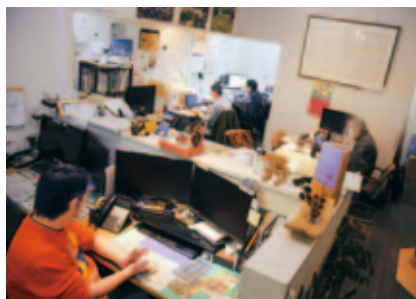
有限会社きたもつく 代表取締役

浅間山の北麓、石ころの荒地地に千数百本の
樹木を植え、北欧の語彙「ルオム」に習い、自
然と人のかかわりをカタチにした 스위트
グラスというキャンプ場をつくる。そこは年
間、10万人の宿泊客でにぎわう。





P20:昨秋オープンした集いの場「タキビバ」で、明けていく空を見ながら、焚火をして朝ご飯 P21:(右上) 薄明の空に、くっきりと姿を現した浅間山の雄姿 (右下) 二度上山で山の手入れ中の若きスタッフたちと (右下左) さまざまな発信をしている「きたもっく」の事務所 (左) 伐採後の二度上山で、「キタカルブルーの空よ」と明美さん。再び芽吹かせるため切り株を残す



光も空気も空もすばらしい

長野原町北軽井沢。長野県との県境に近い浅間山の雄大なすそ野に、きたもっくのキャンプ場「北軽井沢スウィートグラス」がある。到着後、荷を解いているコテージへ現れたのは、福嶋明美さん(68歳)だ。「このお陽さまの光、柔らかくてちよつと違うでしょ。ほら見て、ここに日が淡く射している。12月の日差し、ほんとにきれいなもの」

挨拶もそつちのけで、いきなり北軽井沢の透明感のある光に話が弾んだ。

スウィートグラスは、キャンピングコテージ、そして野外テントのスペースと、その面積3万坪。年間10万人が訪れるというキャンプ場だ。「ここへ来た当初はキャンプ場を始め

るなんて、夢にも思っていなかったんです」1990年、故郷へ戻りたいという夫の誠さん(69歳)と当時住んでいた千葉県から移り住んだ。ところが来てみて、「もう、日々感動なの」。光も空気も空も月も星も、感じたことのないすばらしさ。しかも時間によって刻々移ろう繊細な気配。横浜で生まれ育った都会っ子の明美さんには、初めて感じる新鮮な感覚だった。「この感動と幸せをお裾分けしたい」この思いこそが始まりだ。

自宅には、広大な土地が手つかずで放置されていた。火山灰が堆積した石混じりの荒地で採草地にしかない土地である。ここでキャンプ場をやってみては、と漠然と抱いた想いが、一挙に現実へ向かって走り出し

たのは、長野原町と姉妹都市である米国モントナ州リビングストーンからホームステイで受け入れたアメリカ人との出会いだった。「アケミたちのために」と尽力してくれた。夫婦は、リビングストーンまでメーカーを訪ねて、ログキットの輸入を決めた。94年、スウィートグラスは5棟のキャンピングから出生した。

暖かい薪ストーブ

植樹に精を出したのは誠さん。人が留まる場所には、樹木の潤いが必要だという信念を持つている。植えては枯れてしまう。そんな労苦が何年にもわたり続いたが、ついに土壌改良や混植によって樹木が根付いた。いまでは大きく枝を広げている。

訪問時期は、桜も夏椿も落葉松も落葉していたが歩くと落葉のクッションがかさこそ柔らかい。それにしても空が広いですね」と言うのと、「電信柱はないんです。電線で遮りたくないから、ケーブルは最初に地下に埋め込んでます」。明美さんの一言に吃驚した。

「この空なんですもの。景観を壊せない。土地の魅力を損ねるのは冒涇だから」と語る言葉に、この地への深い愛着が伝わる。特筆すべきは独創的な宿泊施設だ。それぞれにコンセプトが異なる。例えば「満天星層キャンピング」は寝つ転がって星を思う存分見ることが出来る。最新のコテージには、本格的な石窯を据えた1棟も生まれた。凝った家具や子どもの遊び心をくすぐる秘密基地風の造作

もある。スタッフのアイデアで、地産の木材を使って手づくりしたのだとか。明美さんは、「その人の力になるような場を提供したいんです。ここで何かキャッチして、ああ嬉しいと帰ってほしい」と願う。

各コテージとキャビンには、薪ストーブを配備。アメリカ製のストーブは、料理ができ



地域で伐採した原木の薪をぎっしり積んだ薪棚の前で。薪は、あさまエリアにも配送。寒冷地での薪の輪コミュニティを形成している

たりデザインが洒落ていたり、大きかったりとそれぞれに違うタイプが配置されている。「薪ストーブは石油とはまったく違います。骨の髄からじゅわーっと温まるの」。戸外で雪合戦をしても、コテージやキャビンに戻れば暖かいストーブが待っている。薪で暖を取る経験は都会暮らしでは難しいことだから、炎の魅力に誰もが魅入られるのではないだ

ろうか。北軽の零下20度を下回る寒さも、薪ストーブの完備によって冬の営業が可能となり、雪を心待ちにして訪れるキャンパーが増えたのだという。

通年営業開始を契機に、本格的な会社組織に変化を遂げる。2012年のことだ。「キャンプ場の経営を通し、地域の資源や課題が次第に見えてきた。見つけ出した資源を活用したいと思うようになったんです」と明美さん。「なぜなら、未来は自然の中にあるから」ときっぱり。

譲り受けた二度上山

日々山と向き合い自然の美を享受する暮らしのなかで、何を残せるか、何を次に伝えていくべきかと肌で感じてきた。薪ストーブの導入によって大量の薪が必要となり、近隣の二度上山^{にどあけやま}で伐らせてもらった樹木を自分たちで加工していたが、ひよんなことからその山を、まるごと譲り受けることができた。これを機に、林業専門の部署である地域資源活用事業部「あさまの薪」が誕生した。薪は伐採後の乾燥がカギとなるが、薪ボイラー式の乾燥機まで自社で開発して、量産体制に取り組んでいる。その規模の大きなこと。「あさまの薪」は日本有数の薪製造事業所だ。

二度上山は、ニレ、ナラ、ダケカンバなどが生える広葉樹の山だ。伐採してもひこばえが生じ、木は命を絶やすことはない。薪だけでなく建材にも加工して販売、家具への活用も模索中だ。山では若き木こりたちが精を

出している。地域資源活用事業のメンバーで、アーポリカルチャー（樹木医）の資格を持つ若人たちだ。「百蜜」と名付けた養蜂部門も、その想いから生まれた一つ。蜂は、受粉することで森の命を育む循環の役目を担う。

ルオムの心で生きる

焚火をしながら朝食を取ることになった。スウェーデントーチというやり方で誠さんが火をつける。明美さんが、「あさまの薪」で生産した薪をくべていく。起床5時。闇のなかで、薪だけが赤くちよろちよろと燃えている。神秘的なまでにきれいだ。じっと見ていると高揚感をかき立てられる。炎の揺らぎが火を囲む仲間との連帯感を伝えてくるのも不思議だ。

火を見ながら誠さんが静かに語り始めた。いまも火山活動が観測されている浅間山。この山を地域の人々はよりどころにして生きている。そして、2004年、その浅間山の噴火をきっかけに、生き方を表す言葉を探して、「ルオム」に出会ったことを。

フィンランドの語彙で、「自然に従う生き方」という意味だという。二人の歩く道は、ルオムがバックボーンとなっている。自然を見つめ自然を受け入れ次世代につなぐ。二人の堅い志は、いつまでも燃え続けるに違いない。いつの間にか、浅間山が朝焼けに輝き始めた。午後には、明美さんが名付けた「キタカルブルー」の空になることだろう。

（片柳草生／文 河野千年／撮影）